

しかし、世代間ギャップはあくまでも一般的な傾向において見出せるものであって、何を「援助交際」と考えるか、ということはかなり個人個人の差があるといえよう。たとえば、娘世代でも「ずっと年上の男性にお金をもらってセックスやそれに近い行為をすること」は援助交際ではない、とした回答者が1名いたが、彼女の場合こういう行為は〈お仕事〉である、つまり援助交際とは別の売春という〈仕事〉だ、という理解があるのである。逆に「ずっと年上の男性と金品をもらわずにお茶や食事・カラオケなどにつきあうこと」を「援助交際」と見なす者が22.3%いる、というのも、彼女たちが「援助」の意味を、年長男性からの金銭的援助ではなく、女子高生の側からオジサンに対する精神的援助と捉えているからなのかもしれない。

### ③女子高生ブームのなかの自分をどう見るか

まず、女子高生ブームが今も続いていると思うかどうかを質問したところ、51.1%が「もう下火だと思う」と答えており、その多くがピークは97年だったと答えている(表29)。「今も続いている」と答えたのは35.5%、「もう終わっている」が9.1%であった。また、「女子高生ブーム」というのは自分にとって良いことか悪いことか、という質問に対しては「どちらでもない」というのが過半数(53.8%)を占め、次いで「悪いこと」(23.1%)「良いこと」(19.0%)と続く(表30)。「悪いこと」の理由はほぼ全員が色眼鏡で見られること(〈普通にしてる子もコギャルのイメージでみられる〉〈みんな同じに見られる〉)を挙げたが、「良いこと」の方はもう少しバラエティがあり、〈チャホヤされるのは嬉しい〉〈おじさんとかがなんとなく優しくしてくれる〉〈おまけしてくれる〉〈やっぱ頂点になった気分だから〉〈みんながおしゃれになっている〉〈高校生の雑誌とかがいっぱい出て、友人が出たりして楽しかったから〉〈女子高生である優越感がある〉〈私たちの歳が中心、注目されている〉などがあつた。

最後に「早く大人になりたいか、それともいつまでも中高生でいたいか」ということを聞いた(表31)。「早く大人になりたい」と答えたのが40.4%、「いつまでも中高生でいたい」と答えたのが36.3%で、さすがに「早く大人になりたい」よりは少なかったが、かなり高い割合である。上記のように「頂点になった気分」であれば、当然の結果かもしれない。これを男子生徒と比較することができたら興味深いだろう。

## 考察

本調査では、少女たち自身の制服に対する思い入れと、制服が大人の男性にどう受け止められているかについての彼女たちの認識、の両面を探った。80年代後半、第二次ベビーブーム世代(1971~74年生まれ)が高校に入り始めたあたりから、私立女子校が生徒獲得のために、制服のリニューアルを開始し、タータンチェックのミニスカートに白ブラウス、ベストの組み合わせの制服が急増した。1985年に登場した『東京女子高制服図鑑』なる本も、制服のモデルチェンジのサイクルが非常に短いため、ほぼ毎年内容を刷新して発行されていた。<sup>5</sup> そうしたなか、高校生活の中で制服が持つ意味合いが次第に大きくなり、ルーズソックスやラルフ・ローレンのセーターなど、高校生独自の制服ファッションも発生してきたわけだ。彼女たちにとって、スカートの短さも、ルーズなソックスも決して「オジサン」の目を引くためのものではなく、ピア・グループ(高校生同士の集団)へのアイデンティフィケーションや、コミュニケーションの手がかりとして機能しており、しかもそれが高校時代の3年間しか身につけることができない、ということが一種の希少価値となって、彼らの思い入れを強めているのである。

しかし、そうした彼女たちの思いとは無関係に、制服を着た少女たちをまるで「商品」のように扱う人々がいる。数多くの少女たちが、制服を着ているときに、年長男性(しかもしばしば自分の父親と同世代の男性)に声をかけられ、しかも「1万円」「3万円」と値踏みまでされているのである。彼女たちは別に夜遊びをしていたわけではない。声をかけられるのも新宿や渋谷といった繁華街ばかりではなく、町田のような郊外都市や地元の住宅街であつたりする。これまでいわれてきたように、テレクラや伝言ダイヤルなどの新しいメディアを利用している子だけが、「援助交際」の可能性を持っているのではない。ただ制服を着て街を歩いているだけで、十分に「援交」

を求める年長男性のターゲットになり得るのである。繰り返し声をかけられた少女は次第に警戒心を薄れさせ、相手をみくびるようになっていたり、少しくらいならつきあってもいいかもしれないと思うようになっていたりする。思春期女子の性行動の変化を論じる際には、まず、こうした社会環境の変容を把握しておかなくてはならない。

「援助交際」という言葉の曖昧さにも問題があるように思われる。少女たちの多くは、「最近のオヤジは女子高生といったら皆ウリ（売春）をやると思っている」と憤る一方で、性行為を伴わない「援助交際」については、「危ないと思うけど、うらやましい」という意識も持っている。しかも、相手が中年男性であれば「きっと家族に相手にされなくて淋しいのだろう」から、お金をくれるならカラオケくらい付き合ってもいいだろう、とあってしまったり、相手が比較的若めのオジサンなら、お金の絡まない、いずれ恋愛に発展するような「普通のナンパ」かもしれない、という期待を持ってしまったりする。実際にそういう相手に出会うことが絶対にないわけではないだろうが、少女の側のそうした曖昧な期待は、「援助交際＝性行為」と思い込んでいる相手によってしばしば裏切られるのであり、場合によっては少女たちを本当の危険に晒すことにもつながるのである。

もちろん4人に3人の中高生が声をかけられたからといって、4人に3人の年長男性がそういうことをしているわけではなく、おそらく少数の男性がうまく相手がひっかかるまで、1人で何人も少女に繰り返し声をかけているのであろう。そして、少女たちの大半はそうした年長男性の誘いを今後も「無視する」「断る」と答えている。しかし、街を歩くだけで男性によって値踏みされるような体験が、思春期の少女たちのセルフ・エスティーム（自尊心）にどのような影響を与えるか、ということは今後さらに検討を重ねる必要があるだろう。都市空間におけるポルノグラフィの氾濫が、性差別やセクシャル・ハラスメントの文脈で批判されるようになって久しいが、そういった間接的なハラスメントだけでなく、生身の人間から直接に「お前を買いたい」「お前はいくらだ」というメッセージを受け取ることが、女性（特に成長期の女性に）にとってどういう意味を持つのか、私達はもっと考えていかねばならないのではなかろうか。

## <第二部>大人向け雑誌における「女子高生」関連記事分析

### 研究方法

ここで提示される雑誌の資料は、大宅壮一文庫の雑誌記事検索サービスを利用して収集したものである。その際、件名として「女子高生」「少女売春」「10代の性」という主題のものを検索し、時期の設定を90年から96年までとした。この時期の設定に関しては、昨年度の研究報告並びに質問紙調査の結果を参考にした。<sup>3</sup>つまり、この90年から96年までの時期は、「第二次女子高生ブーム」とでも呼び得る時期をカバーし、なおかつ質問紙調査の際にも被調査者が認識していた「女子高生ブーム」の時期を包含しているからである。

この入手した資料の記事を分析するにあたって、共通に分析する項目を以下のように設定した。第一に、記名記事に関する項目、具体的には、記名記事の確認、その筆者の性別を調べること、そして内容その他の面で特筆すべき筆者に関して分析するという項目を設定した。第二に、女子高生をめぐる語彙に関する項目、「テレクラ」「ボケベル」「ブルセラ」「援助交際」「コギャル」「マゴ（孫）ギャル」「制服（セーラー服）」などの言葉が、タイトルおよびリードに出現した頻度などを調べた。第三に、それらの記事の質、すなわち女子高生を特集した記事や連載記事の確認や、特に記事の中で写真がどのような位置を占めているのかについて調べることにした。

### 研究結果

#### 1. 全体的な記事数の変化

私たちが入手した記事を掲載している雑誌は、計66誌であり、その雑誌名を以下に示しておきたい。冒頭にあるジャンル名は、私たちが分析上便宜的に名づけたものである。

写真週刊誌：『FOCUS』『FRIDAY (臨時増刊含む)』『FLASH (臨時増刊含む)』  
 中年男性向け週刊誌：『アサヒ芸能』『週刊現代』『週刊時事』『週刊大衆』『週刊テーマス』  
 『週刊宝石』『週刊ポスト』  
 若年男性向け週刊誌：『週刊プレイボーイ』『宝島』『GORO』『月刊プレイボーイ』『スコラ』  
 情報誌：『ACROSS』『SAPIO』『DIME』『ターザン』『Bart』『ビジネス・インテリジェンス』『Views』『プレジデント』『マルコポーロ』  
 新聞社および大手出版社刊行の週刊誌：『AERA』『サンデー毎日』『週刊朝日』『週刊読売』『SPA!』『週刊新潮』『週刊文春』『週刊明星』『ニューズウィーク日本版』  
 読み物雑誌：『潮』『噂の真相』『月刊Asahi』『現代』『自由時間』『諸君』『新潮45』『太陽』『宝島30』『知識』『調査情報』『創』『東京人』『Number』『日経イメージ気象観測』『鳩よ』『文芸春秋』『へるめす』『宝石』  
 女性誌：『CREA』『クロワッサン』『週刊女性』『JUNON』『主婦と生活』『主婦の友』『女性自身』『女性セブン』『non no』『微笑』『婦人公論』  
 男性ファッション誌：『checkmate』『DENIM』『メンズノンノ』

今回の報告は、以上の雑誌における全体的傾向の分析を中心として、適宜具体例を言及することとし、ジャンルによる傾向を含めた分析は稿を改めて行いたい。これらの雑誌の記事数の変化は、順に90年23件、91年29件、92年17件、93年135件、94年185件、95年86件、96年193件であった（表32を参照）。

この件数の変化で特徴的なのは、93年、94年と96年の突出した数である。93年の件数の増加は、おそらく93年8月から9月にかけて、続々と女子高生が巻き込まれた性犯罪の摘発（特に、「ブルセラの帝王」なる人物の逮捕、有名ブルセラショップ「ロベ」等の摘発）が、源になっていると思われる。ちなみにこの「ブルセラの帝王」なる人物は、女子高生をナンパした後、そのナンパした女子高生との性行為をビデオに撮るといふ、いわゆる「ハメ撮り」を繰り返していた男性である。また94年は前年に引き続いた、いわゆる「ブルセラブーム」の影響が見えてくる。96年は、7月にテレビ朝日の『朝まで生テレビ』において「女子高生とニッポン」という番組が組まれた年でもあり、大宅壮一文庫のカテゴリーに加えられるほど「援助交際」という言葉が社会的に認知された年である。

## 2. 記名記事について

記名記事の件数は、全体のほぼ36%を占めている。その中でも、やはり全体の記事数の変化と比例してか、93年と94年、そして96年に集中している（全体で243件、93年56件、94年73件、96年65件）。記名記事の書き手の数は、男性が79人であり、女性は52人である。しかし、この書き手たちが書いている件数となると男性の方が圧倒的に多くなっている（男性163件、女性68件、男女混合12件）。もちろんこの件数に関しては、同一の書き手による連載記事も含まれているのであるが、情報発信の場におけるジェンダー格差が反映され、その格差によって「女子高生」を主題にする記事が、結局男性からの視点によって書かれているということが言えるであろう。

具体的な書き手について見てみよう（表33を参照）。女性の書き手で多かったのは、速水由紀子、家田荘子、西川その子などであり、男性の書き手で多かったのは、藤井良樹、白木雅彦、中森明夫などである。この内白木は、『DIME』において23週間もの連載を展開しているが、その内容はマーケティング的なもの、つまり女子高生の間での流行を紹介するものであり、他の頻出する書き手とは別物と考えた方がよい。また中森明夫については、『SPA!』連載の「中森明夫新聞」において他の書き手に発言の場を与えているという意味合いが強い。予想したほど、宮台真司は記事を書いてはいない。彼が書いた記事数は、全て合わせても10件（内、対談などが5件）である。社会学者である宮台真司は、『制服少女たちの選択』などの著書をものし、また93年に『朝日新聞』文化面で「ブルセラ論戦」を展開するなど、女子高生文化のコメンテーターとして早くから登場していたにもかかわらず、雑誌というメディアに彼自身が書いた記事は相対的に少ない。<sup>6-7</sup>むしろその点では、職業ライターである黒沼克司の記名記事のほうが多い。おそらく私たちが

抱いているイメージ、つまり「ブルセラ＝宮台」というイメージは、雑誌というメディアよりも、テレビ（『朝まで生テレビ』など）によって作られているのかもしれない。また、上記の書き手たちには、彼女／彼らの相互的なネットワークが存在するように思われる（例えば、「中森明夫新聞」という連載記事に登場する書き手たちなど）。ただし今回の分析では紙幅の都合上、その確認までは踏み込まない。

### 3. 女子高生をめぐる語彙

女子高生をめぐる語彙として以下では、「テレクラ」「ポケベル」「ブルセラ」「援助交際」「コギャル」「マゴ（孫）ギャル」「制服（セーラー服）」のタイトルとリードに出現した頻度を調べた（表34を参照のこと）。（以下でタイトルとは、その記事の開始ページで独立して書かれているものが中心であり、リードとは、タイトルよりも小さい字体ではあるが、ゴシック体などを使って記事の最初に書かれている5、6行の段落のことを指す）。

#### ①制服（セーラー服）

「制服」あるいは「セーラー服」という言葉は、90年からタイトルの中に記されている。ただしその件数は少ない。90年代当初は女子高生の水着写真とともに「脱ぐもの」として記事タイトルに登場したりするが、次第に「ブルセラ」という言葉とともに使われるようになる。後述するように、「制服」という言葉は、「ブルセラ」に取って代わられる傾向にある。

#### ②テレクラ

「テレクラ」という言葉は、7年間でも25件と意外に少なかった。初出は、91年1月であるが、頻繁に使用されるようになるのは、93年になってからである。リードの部分に書かれていたものを含めても、34件である。これとともに、「デートクラブ」「ツーショットクラブ」などの風俗営業に関する言葉も流通している。これは、雑誌の記事になる場合、「テレクラ」よりも「デートクラブ」に関連した事件（93年から94年にかけて「女子高生デートクラブ」が続々摘発された）が多かったことも関係しているようだ。またこのキーワードを含んだタイトルの記事には、女子高生のテレクラ利用経験率の調査を引くものが多かった。

#### ③ポケベル

女子高生がよく使用していると言われるパーソナルメディアの一つ、「ポケベル」という言葉も意外に少なかった。この言葉の初出は93年であり、タイトルに含まれている数は7年間でも13件、リードに含まれていたものを合わせても18件である。その他「携帯電話」「PHS」などの女子高生がよく使っていると言われるパーソナルメディアについても、タイトルにおいて使用されているものはそれほど多くはない。

#### ④ブルセラ

「ブルセラ」という言葉は、116件のタイトルで使用されていた。おそらく記事の文中に92年頃からあったと思われるが、タイトルに出現したのは93年であり、そのほとんどが93年、94年に集中する。この両年で100件を超える件数があり、これが95年には一桁に件数が激減する。ブルセラブームは、94年末から95年初頭に終了したと言っても過言ではないだろう。「ブルセラ」という言葉がもともと、「ブル」はブルマーであり、「セラ」はセーラー服のことであるから、当然のことかもしれないが、この言葉が登場した以降は、「制服」という言葉が少なくなっている。

#### ⑤コギャル

「コギャル」は93年に出現する。全体の記事件数が落ち込む95年でも相対的に数は減少せず、96年に、タイトルのみでも43件で使われている。「コギャル」という言葉の使用が最も多い96年頃に、女子高生一般を指す言葉として定着したと推測される。また一方では、「ブルセラ女子高生」という記述も女子高生一般を指す言葉として使用されているわけだが、上記「ブルセラ」という言葉の使用が減少するとともに、「コギャル」という言葉が使用されるようになったとも考えられ

る。

#### ⑥マゴギャル

「コギャル」という言葉に対応して、それよりも若い女子中学生を指す言葉、「マゴギャル」という言葉は、94年に現れる。しかし「コギャル」ほどその数は増加しない(6→5→2)。もちろん、今回収集したデータの性格上の問題(「女子高生」「少女売春」「10代の性」という検索キーワードで選んでいるということ)かもしれないが、「コギャル」があつてこそその「マゴギャル」という言葉なのではないかと思われる。ちなみに、ある記事では、女子中高生を「いちご」世代と呼んでいる。

#### ⑦援助交際

「援助交際」という言葉は、タイトル、リードにもなかなか出現しない。全体の中でも26件ほどである。この言葉が上記雑誌全誌の中で最初に使われたのは、93年10月6日号の『SPA!』においてであり、言葉としてはこの頃から使用されてはいたはずであるが、タイトルなどで頻繁に使用され始めるのは96年4月以降である。なお、大手新聞社系の雑誌などでは、女子高生の売春については「援助交際」という言葉よりも、直截に「売春」という言葉が使用されていた。

### 4. 連載記事と特集記事

まずここでの連載記事と特集記事の定義を示しておく。連載記事と特集記事はともに「女子高生に関する主題が設定されていること」を前提とし、連載記事は「一定期間の間、号をまたがって連続した記事が提示されているもの」であり、特集記事は「一つの号の中に、ある程度独立した記事がパッケージ化されて掲載されているもの」であると定義した。

連載記事としてカウントできるものは、全体で10のシリーズがあつた(表35を参照)。女子高生をその内容の中心とする連載記事は、93年に3つ(3回連載が2つと23回連載)、94年に2つ(上下と回数不明)、96年に5つ(それぞれ上下連載、3回、6回、10回、17回)。上記の連載の内、93年の23週間にもわたって連載された『DIME』の記事は先述したように、「女子高生デート倶楽部」という題名にもかかわらず、マーケティングあるいは流行を紹介する意味合いが強い。94年以降に登場する連載記事は、例えば94年の「コギャルのマーチ」(『女性自身』)や、96年の10回と17回という大きな連載のタイトルが、それぞれ「セーラー服の内側」「六本木コギャル」(いずれも『週刊大衆』)であるように、すべて女子高生の性の乱れを記したものである。

今回収集したデータの中で特集記事として最も早いものは、『スコラ』の90年4月12日号、「全告白女子高生のSEX根掘り葉掘り」という記事である。この日付を見る限り、これ以前にも女子高生を特集した記事が存在する可能性は否めない。この記事からカウントして特集記事の数は29件であつた。また、95年1月の『創』における「女子高生という記号」という特集では、女子高生やブルセラブームなどのテーマについて、よく文章を書いている書き手(例えば藤井良樹、家田荘子、宮台真司など)が登場している。この特集は、『創』という雑誌自体が「メディア批評」を主題とするがゆえに、他の特集記事とは趣を異にし、分析的な文章が並んでいる。

### 5. 写真を扱う記事の関係

全体的に見るならば、文章を主とした記事が圧倒的に多い。ただし、そういった文章を主とした記事でも必ずと言っていいほど写真は使われている。

写真が主となっている記事は、93年以降に増加する(表35を参照)。それまで一桁台だったものが、93年には18件、94年には33件となる。これには、写真週刊誌(7年間で44件、その内写真が主となっている93年の記事は8件、同じく94年の記事は12件)も含まれているが、それを含めてこの増加はブルセラブームと呼応した、女子高生の「性的商品化」を示しているのではないだろうか。その理由として、そういった写真が主となっている記事の多くは、女子高生のカタログ的なもの(たとえば同一人物が制服を着た写真と水着を着た写真が一緒に示されているもの)であることをここにあげておく。

また、女子高生に関する写真は、その露出度が年々増していることも示しておこう。例えば、『スコーラ』においては94年に、制服姿の女子高生とプロフィールを同時に掲載するというそれ以前のスタイルから、ヌードや自慰行為を想起させる過激な写真を用いる記事が増加している。こういった変化は、写真週刊誌でも同様であり、上記したような水着写真であっても、その水着の体を覆う部分が少なくなる（『ギリギリ』などの形容詞とともに）傾向が見られる。

## 考察

今回の分析は記事のタイトルを中心にした分析に限られるわけだが、女子高生をめぐる語彙を調べてみると、そのそれぞれが互いに相関していることが見て取れる。90年から92年までの記事の中で、今回調べたタイトルに出て来た語彙は、「制服」が7件、「テレクラ」が1件であった。この時期の「制服」という言葉は、「女子高生の象徴」といった意味合いが強い。この頃はまだトレンドセッター、つまり流行を創り出す存在としての女子高生を中心とした記事も見受けられるし、その一方でダイヤルQ2の一種であるツーショットQ2の摘発などの事件記事が掲載され、女子中高生の性体験に関する記事が載せられるなど、様々な記事が混在している状態である。この時期の記事に一貫して言えるのは、女子高生が「性的商品」となる萌芽が見られるものの、その積極性のようなものは殊更に強調されていないということである。

ところが、93年と94年の「ブルセラブーム」は、女子高生をめぐる語彙の変化をもたらし、それは恐らく私たちの女子高生へのまなざしの変化をももたらしていると思われる。例えば、「制服（セーラー服）」という言葉の入ったタイトルは、90年にも（恐らくそれ以前も）あったわけだが、93年を境にして「ブルセラ」に取って代わられる。言うならば、制服はそこで、「女子高生の象徴」として、さらに言うなら「脱ぐもの」としての意味を剥奪され、むしろ単なる「性的な商品」として提示されるようになったと思われる。それと呼応するかのようには、女子高生は、「ブルセラ女子高生」という言葉によって示される場合もあるわけだが、それよりも「コギャル」という言葉によって提示されるようになる。

一方で、今回の分析により、「援助交際」という言葉は、93年当時から使用されてはいるものの、96年に頻繁に使われるようになったということがわかった。ただし、すでに93年の段階で「援助交際＝ウリ」という意味づけはなされており、また「ブルセラ」という言葉とともに、女子高生の「テレクラ」「デートクラブ」の利用、そしてその摘発が記事となっている。つまり「ウリとしての援助交際」が一般的に使われる素地は、すでに93年頃に出来上がっていたと考えられるのである。

ごくごく単純に言うならば、「制服」から「ブルセラ」へ、「ブルセラ」から「援助交際」へとという流れがあったということになる。つまり、まず身につけていた「制服」が「ブルセラ」として売買の対象となる。それとほぼ同時に、身体自体を売買の対象とする場所として「テレクラ」あるいは「デートクラブ」があったのだが、それが全国的に摘発されるに及んで、自前の手段をとるようになる。それが「援助交際」という身体を売買であり、その道具として「ポケベル」「PHS」「携帯電話」が使われているという図式だ。

しかしこれは、あくまでもマスメディアにおける情報の流れに過ぎないであろう。確かに、私たちが調べた記事の中には、例えば「座談会」形式のもの、つまり仮名の女子高生を何人か集め、彼女たち「自身」に自分の経験を語らせるという記事もあった。すなわち記事に現実感を持たせ、あたかも記事が現実の忠実な写しであると思わせるものもあった。また前述の写真の使い方も、このことに関連しているかもしれない。

しかし、このような情報の流れは、イメージであり、そのイメージと現実とのズレも生み出していると思われる。特に「援助交際」という言葉に関してはそのことが顕著である。その証拠に、この「援助交際」という言葉は、非常に多義的な意味合いを持っているということが記事タイトルを調べるだけでもわかる。例えば、96年の記事には、「援助交際とは、おじさんとデートして、洋服など欲しい物を買ってもらったり、お金をもらったりすること」（『女性セブン』）といった、「援助交際＝ウリ」という意味合いを揺るがす記事がある。また一方では、96年7月のテレビ朝日『朝まで生テレビ 女子高生とニッポン』放映を受けた、女子高生自身による反対討論会が9月に開催されている。この討論会が設定されたこと自体が、それまでのマスメディアによる過剰

な報道への反発を意味し、それは間接的に「援助交際＝ウリ」という意味合いの否定ともとれる。

いずれにせよ、ここにはマスメディアによる過剰な報道が存在していることは確かである。しかもその流れは前記したように、女子高生を「性的に商品化」するような意味づけ方であったことも確かなのである。この流れが、私たちも含めたマスメディアのオーディエンス、特に男性の女子高生に対するイメージ形成に何らかの影響を与えていると思われる。

今回の分析は概観的なものに過ぎないが、90年代前半、とりわけ93年、94年両年を中心にして、女子高生をめぐる雑誌記事には、大きな転換が存在していると言えよう。そしてそれは、女子高生を「性的な商品」として受動的な立場から能動的な立場へと移行したかのような、そして現実とは乖離したイメージを持たせるものであったことが、今回の分析で明確になったことである。

#### □今後の課題

今後、雑誌記事のさらなる詳細な量的並びに質的な研究を展開していくことが必要である。以下にその具体的な方向性をいくつか提示しておきたい。

今回の分析は基本的に記事のタイトルをその中心に据えた分析であった。もちろん上記の記述の中でも記事の内容に触れられる部分は触れたが、さらに深く記事それ自体に踏み込んでいくべきであろう。記事それ自体に何が表現されているのか。それに何らかの傾向性などがあるのかどうか。記事タイトルとの関係などについても調べる必要があるだろう。

今回の記事タイトルを調べた上で、記事の形式が記事の読まれ方に与える影響について考察する必要性を感じた。具体的にはルポ型記事、座談会やインタビューなどを中心に、量的な分析並びにエスノグラフィ的分析が挙げられるであろう。またこのことは、雑誌のルポやインタビュー、座談会などでよく登場する出会いのツールや場所と、統計的な調査の結果との付き合い合わせなどによる比較をしてみることも価値があると思われる。

また写真の扱われ方についても同様にさらに深く検討するべきである。「ブルセラブーム」が起きて以降、雑誌記事における写真記事に変化があることは確認したが、その割合、量などまでは今回調べることができなかった。女子高生のイメージなどに写真が与える影響は大きなものだろう。この点についても量的な分析と質的な分析を深めていきたい。

#### 結論

第一部の質問紙調査の結果と、第二部の大人向け雑誌の記事分析の結果から、次のようなことがいえる。

- (1) 今日の思春期女子の性行動の変化は、年長男性の性行動の変化と同期している(図1を参照)。東京都性教育研究会の調査(3年毎に実施)によると、高校3年男子の性交経験率は1987年から96年に至るまで、22%から28%の間で上下しており、目立った増加は見られない。<sup>2</sup>一方、高校3年女子でみると、87年、90年と17~18%台であるが、「ブルセラ」報道で急に大人向け雑誌に「女子高生」関連記事件数が増えた93年に22.3%に微増、そして「援助交際」が雑誌だけでなくテレビをも賑わせた96年には34.0%と、90年の倍の割合にはね上がって、男子を追い抜いてしまう。もちろん、性交経験の増加をすべて「援助交際」によるものとは断定できないが、同年代の男子との性交だけでなく、年長男性との性交が増えたことはおそらく間違いないことである。メディアが作り出した「女子高生」ブームが行動の変化を引き起こしたのか、単にメディアは行動の変化を報道しただけなのか(つまりにわとりが先か、たまごが先か)ということは、容易に結論を出せるものではないが、メディアの過熱報道は男性側と少女側双方の行動の変容に一層の拍車をかける効果があったのではないかと思われる。
- (2) 異世代(年長男性と若年女子)間の性的交渉の増加の原因を、テレクラ等の新メディアのみに帰することは出来ない。従来、思春期女子の「不純異性交遊」は、同世代間の性交渉を指すことが多く、異世代間の性交渉は特殊な例(たとえばヤクザが絡んだ女子高生売春とか、教師と教え子の恋愛)を除いては一般的なものではなかった。そういう意味では93

年以降の、思春期女子の性行動の活発化は、世代の異なる男女を結ぶ新しいコミュニケーションのチャンネルが出来上がったことを示している。一般に言われるように、テレクラや伝言ダイヤル、あるいはポケベルや携帯といった新しいメディアがそれを可能にした部分も確かにあるだろう。しかし、今回の街頭調査が明らかにしたように、そのようなメディアを使わなくても、年長男性は街中で直接少女たちに誘いの声をかけるようになっている。いわば「援助交際」という言葉が出来たことが、つまり年長男性が未成年少女と交渉を持つことに名前が与えられたこと自体が、新たなコミュニケーション・チャンネルを創出したのではないか。しかも「援助交際」という言葉の意味の不透明性が、世代間の意識のずれを生み、二者間の交渉を少女にとって不利なものにしているように思われる。

- (3) 90年代の女子高生の性的商品化は、3段階のステップを踏んでいる。80年代末に第二次ベビーブーム世代が高校生になり、中高生が大きなマーケットとして注目を集めたが、90年代初頭の雑誌記事にはその名残が見られ、まだ性的な商品として扱う傾向は弱い。93年のブルセラ報道から急激に「女子高生」関連記事が増加し、内容も性的になるが、その時点ではまだ「制服」そのもののフェティシズムがあった。これが第3段階に入ると関心は「制服」そのものではなく、中身の少女たち自身に移っていく。「援助交際」という言葉自体は93年頃から使われているのだが、96年に爆発的に一般メディアに広まった。「トレンドセッター」「ブルセラ女子高生」「援助交際コギャル」と、いずれのステップにおいても、基本的に少女たちの「主体性」、能動性に焦点が当てられてきた。「純真無垢」で不可侵なもの、さらに性に対して受け身な存在としての「少女」のイメージは崩壊し、むしろ積極的に自己主張する存在として描かれるようになったことにより、年長の男性が未成熟な少女に触れることに対して、かつてあったようなタブー意識が薄れてきたと言えるだろう。

## 文献

- <sup>1</sup> 日本性教育協会「青少年の性に関する調査」1987、1993
- <sup>2</sup> 東京都性教育研究会「中・高生の性意識・性行動に関する調査」1987、1990、1993、1996
- <sup>3</sup> 村松泰子、佐藤（佐久間）りか、斎藤文栄、平野亜矢「少女雑誌の性情報と若年期のリプロダクティブ・ヘルス」（私家版報告書）1998
- <sup>4</sup> 大治朋子「短期集中連載・5 欲望する少女」『サンデー毎日』1997年10月12日号
- <sup>5</sup> 森伸之『東京女子高制服図鑑』（弓立社）1985、『同・昭和62年度版』1986、『同・昭和63-64年度版』1988、『同・'89-'90年度版』1989、『同・'91年度版』1991、『同・'92年度版』1992、『同・'93年度版』1993、『同・'94年度版』1993（ちなみにブルセラが問題化した93年末に発行された94年度版を最後に新版は発行されていない）
- <sup>6</sup> 宮台真司『制服少女たちの選択』（講談社）1994
- <sup>7</sup> 宮台真司「ブルセラショップの女子高生——本当の危険を見極める冷静さ必要」『朝日新聞』93年9月9日夕刊



(表1) 調査対象の学年 (調査地別)

	新宿	町田	合計
中学1年	0 (0.0%)	2 (3.5)	2 (1.7)
中学2年	2 (3.1)	2 (3.5)	4 (3.3)
中学3年	10 (15.6)	2 (3.5)	12 (9.9)
高校1年	12 (18.8)	22 (38.6)	34 (28.1)
高校2年	20 (31.25)	15 (26.3)	35 (28.9)
高校3年	20 (31.25)	14 (24.6)	34 (28.1)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表2) 通っている学校の種類

	新宿	町田	合計
公立共学校	8 (12.5%)	25 (43.8)	33 (27.3)
公立女学校	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
私立共学校	22 (34.4)	14 (24.6)	36 (29.8)
私立女子校	34 (53.1)	18 (31.6)	52 (42.9)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表3) 調査対象の居住地および調査地が通学路であるかどうか

	新宿	町田	合計
東京23区	28 (43.7%)	3 (5.3)	31 (25.6)
東京都下	18 (28.1)	22 (38.6)	40 (33.0)
神奈川	4 (6.3)	32 (56.1)	36 (29.8)
千葉	7 (10.9)	0 (0.0)	7 (5.8)
その他	6 (9.4)	0 (0.0)	6 (5.0)
無回答	1 (1.6)	0 (0.0)	1 (0.8)
調査地が通学路である	35 (54.7)	38 (66.7)	73 (60.3)
調査地が通学路でない	29 (45.3)	19 (33.3)	48 (39.7)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表4) 「あなたが今着ているのはあなたの学校の制服 (標準服) ですか？」

	新宿	町田	合計
はい	54 (84.4%)	49 (86.0)	103 (85.1)
いいえ	10 (15.6)	8 (14.0)	18 (14.9)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表5) 「通学や学校関連行事以外のときにもその制服 (あるいは制服風の服) を着ていますか？」

	新宿	町田	合計
はい	18 (28.1%)	19 (33.3)	37 (30.6)
いいえ	45 (70.3)	36 (63.2)	81 (66.9)
無回答	1 (1.6)	2 (3.5)	3 (2.5)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表6) 「高校を卒業して制服を着なくなったらどう感じると思いますか？」

	新宿	町田	合計
嬉しい	7 (10.9%)	3 (5.3)	10 (8.3)
淋しい	40 (62.5)	34 (59.6)	74 (61.1)
別に何とも思わない	9 (14.1)	12 (21.1)	21 (17.4)
その他	6 (9.4)	6 (10.5)	12 (9.9)
無回答	2 (3.1)	2 (3.5)	4 (3.3)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表7)「制服を着ているときと着ていないときとで、男性の視線に違いを感じますか？」

	新宿	町田	合計
感じる	42 (65.6%)	29 (50.9)	71 (58.7)
感じない	21 (32.8)	28 (49.1)	49 (40.5)
無回答	1 (1.6)	0 (0.0)	1 (0.8)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表8)「街で『若めのオジサン』(25歳以上で自分の父親よりは若いと思われる男性)に声をかけられた(ナンパされた)経験はありますか？」

	新宿	町田	合計
たびたびある	23 (35.9%)	11 (19.3)	34 (28.1)
1~2度ある	22 (34.4)	27 (47.4)	49 (40.5)
ない	19 (29.7)	19 (33.3)	38 (31.4)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表9)「街で『中年のオジサン』(自分の父親と同じくらいかそれ以上の年齢だと思われる男性)に声をかけられた(ナンパされた)経験はありますか？」

	新宿	町田	合計
たびたびある	20 (31.3%)	12 (21.1)	32 (26.4)
1~2度ある	13 (20.3)	12 (21.1)	25 (20.7)
ない	31 (48.4)	33 (57.8)	64 (52.9)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表10) 街でオジサン(25歳以上の男性)に一度でも声をかけられたことがある割合

	新宿	町田	合計
ある	48 (75.0%)	43 (75.4)	91 (75.2)
ない	16 (25.0)	14 (24.6)	30 (24.8)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表11)「初めて声をかけられたのは何年生のときでしたか？」(以下、新宿・町田合計)

	相手が若めのオジサンの場合	相手が中年のオジサンの場合
小学生時代	5 (6.0%)	4 (7.0%)
中学1年	4 (4.8)	2 (3.5)
中学2年	12 (14.5)	9 (15.8)
中学3年	22 (26.5)	10 (17.5)
高校1年	28 (33.8)	19 (33.4)
高校2年	10 (12.0)	8 (14.0)
高校3年	0 (0.0)	1 (1.8)
無回答	2 (2.4)	4 (7.0)
合計	83 (100.0)	57 (100.0)

(表12)「何とって声をかけられましたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n=83)	相手が中年のオジサンの場合 (n=56)
ただ声をかけられただけ	20 (24.1%)	10 (17.9%)
お茶に誘われた	17 (20.5)	9 (16.1)
食事に誘われた	3 (3.6)	6 (10.7)
カラオケに誘われた	27 (32.5)	22 (39.3)
ホテルに誘われた	2 (2.4)	4 (7.1)
ドライブに誘われた	7 (8.4)	5 (8.9)
それ以外のことを求められた	35 (42.2)	19 (33.9)

(表 13-1) 『お金をあげるから』あるいは『何か買ってあげるから』と言われたことはありますか？

	相手が若めのオジサン	相手が中年のオジサン	若め・中年含めたオジサン全体*
はい	38 (46.3%)	36 (66.7%)	53 (58.2%)
いいえ	44 (53.7)	18 (33.3)	38 (41.8)
合計	82 (100.0)	54 (100.0)	91 (100.0)

\*25 歳以上の男性に声をかけられたことがある回答者のうち、一度でも金品供与の申し出を受けたことのある者

(表 13-2) 「はい」と答えた方は「具体的に何といわれましたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n=34)	相手が中年のオジサンの場合 (n=35)
具体的な金額提示なし	15 (44.1%)	13 (37.1%)
10万円以上あげる	0 (0.0)	0 (0.0)
5万円以上10万円未満	4 (11.8)	3 (8.6)
1万円以上5万円未満	11 (32.4)	13 (37.1)
1万円未満	1 (2.9)	0 (0.0)
具体的な品名は挙げずに「何か買ってあげる」	6 (17.6)	1 (2.9)
具体的に「○○を買ってあげる」	4 (11.8)	5 (14.3)

(表 14) 「声をかけられたとき、あなたは1人でしたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n=82)	相手が中年のオジサンの場合 (n=51)
1人だった	56 (68.3%)	32 (62.7%)
2人だった	34 (41.5)	20 (39.2)
3人以上だった	3 (3.7)	4 (7.8)

(表 15) 「声をかけられたとき、相手は1人でしたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n=80)	相手が中年のオジサンの場合 (n=51)
1人だった	71 (88.8%)	53 (94.6%)
2人だった	13 (16.3)	3 (5.4)
3人以上だった	0 (0.0)	2 (3.6)

(表 16) 「これまでに声をかけられたとき、あなたはどんな服装をしていましたか？」

	相手が若めのオジサンの場合	相手が中年のオジサンの場合
制服(制服風の服)だった	40 (48.8%)	31 (55.4%)
私服だった	17 (20.7)	14 (25.0)
制服のときも私服のときもあった	25 (30.5)	11 (19.6)
合計	82 (100.0)	56 (100.0)

(表 17) 「それは何時くらいの時間帯でしたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n=82)	相手が中年のオジサンの場合 (n=55)
朝(登校時間の頃)	2 (2.4%)	1 (1.8%)
午前中	4 (4.9)	2 (3.9)
午後5時前	25 (30.5)	17 (30.9)
午後5~9時	52 (63.4)	31 (56.4)
午後9時~深夜0時	16 (19.5)	13 (23.6)
深夜0時以降	3 (3.7)	1 (1.8)

(表 18)「初めて声をかけられたとき、どう思いましたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n=82)	相手が中年のオジサンの場合 (n=56)
面白かった	4 (4.9%)	0 (0.0%)
腹が立った	13 (15.9)	10 (17.9)
気持ち悪かった	52 (63.4)	40 (71.4)
こわかった	29 (35.4)	13 (23.2)
嬉しかった	3 (3.7)	0 (0.0)
危ないと思った	16 (19.5)	8 (14.3)
得した、ラッキーと思った	2 (2.4)	0 (0.0)
侮辱されたと思った	2 (2.4)	0 (0.0)
自尊心をくすぐられた	0 (0.0)	0 (0.0)
楽しかった	0 (0.0)	0 (0.0)
何とも思わなかった	6 (7.3)	3 (5.4)
その他	18 (22.0)	11 (19.6)

(表 19)「そのオジサンのことをどう思いましたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n=82)	相手が中年のオジサンの場合 (n=55)
感じがいい	3 (3.7%)	0 (0.0%)
いやらしい	26 (31.7)	19 (34.5)
かわいそう	1 (1.2)	1 (1.8)
バカみたい	40 (48.8)	22 (40.0)
特になし	4 (4.9)	4 (7.3)
その他	25 (30.5)	17 (30.9)

(表 20)「それであなたはどうしましたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n=82)	相手が中年のオジサンの場合 (n=56)
黙って無視した	35 (42.7%)	29 (51.8%)
話を聞かずにすぐに断った	22 (26.8)	13 (23.2)
その場で話を聞いた上で断った	16 (19.5)	12 (21.4)
納得できる範囲でつきあってあげた	2 (2.4)	1 (1.8)
その他	13 (15.9)	6 (10.7)

(表 21)「今同じように声をかけられたら、あなたはどのように感じると思いますか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n=82)	相手が中年のオジサンの場合 (n=56)
面白い	2 (2.4%)	0 (0.0%)
腹が立つ	18 (22.0)	17 (30.4)
気持ち悪い	38 (46.3)	20 (35.7)
こわい	10 (12.2)	7 (12.5)
嬉しい	2 (2.4)	0 (0.0)
危ないと思う	8 (9.8)	5 (8.9)
得した、ラッキーと思う	1 (1.2)	0 (0.0)
侮辱されたと思う	1 (1.2)	1 (1.8)
自尊心をくすぐられる	0 (0.0)	0 (0.0)
楽しい	1 (1.2)	0 (0.0)
何とも思わない	16 (19.5)	7 (12.5)
その他	11 (13.4)	12 (21.4)

(表 22) 「今同じように声をかけられたら、あなたはどのように思いますか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n=82)	相手が中年のオジサンの場合 (n=56)
黙って無視する	44 (53.7%)	34 (60.7%)
話を聞かずにすぐに断る	26 (31.7)	22 (39.3)
その場で話を聞いた上で断る	10 (12.2)	1 (1.8)
納得できる範囲でつきあってあげる	2 (2.4)	0 (0.0)
その他	8 (9.8)	4 (7.1)

(表 23) 「これまでに『無視した』『断った』『つきあってあげた』ために怖い目にあったことはありますか？」

	相手が若めのオジサンの場合	相手が中年のオジサンの場合
はい	21 (25.3%)	13 (22.8%)
いいえ	58 (69.9)	40 (70.2)
無回答	4 (4.8)	4 (7.0)
合計	83 (100.0)	57 (100.0)

(表 24) 「オジサンに声をかけられたことを親に話しましたか？」

	相手が若めのオジサンの場合	相手が中年のオジサンの場合
両親に話した	10 (12.0%)	6 (10.5%)
母親にだけ話した	20 (24.1)	11 (19.3)
父親にだけ話した	2 (2.4)	0 (0.0)
どちらにも話さない	48 (57.8)	38 (66.7)
無回答	3 (3.6)	2 (3.5)
合計	83 (100.0)	57 (100.0)

(表 25) 「あなたの友達の中に 25 歳以上のオジサン (若め・中年含め) から声をかけられた (ナンパされた) 経験がある人は何人くらいいますか？」

	本人が声をかけられたことがある	本人が一度も声をかけられたことがない	合計
3人以上いる	64 (70.3%)	8 (26.7)	72 (59.5)
1~2人いる	14 (15.4)	14 (46.6)	28 (23.1)
1人もいない	11 (12.1)	8 (26.7)	19 (15.7)
無回答	2 (2.2)	0 (0.0)	2 (1.7)
合計	91 (100.0)	30 (100.0)	121 (100.0)

(表 26-1) 「街中や電車の中などで痴漢に遭ったことはありますか？」

たびたびある	1~2度ある	ない	無回答	合計
55 (45.5%)	40 (33.1)	25 (20.7)	1 (0.8)	121 (100.0)

(表 26-2) 「ある」と答えた方は「制服のときと私服のときでどちら痴漢に遭いやすいと思いますか？」

制服の方が遭いやすい	79 (83.2%)
私服の方が遭いやすい	7 (7.4)
どちらとも言えない	7 (7.4)
無回答	2 (2.1)
合計	95 (100.0)

(表 27) 「マスコミで報道される『女子中高生』のイメージについて、あなたはどのように思いますか？」

実際そのような人が多いと思う	18 (14.9%)
一部にはそういう人もいるが、そうでない人の方が多いと思う	95 (78.5)
そのような人はほとんどいないと思う	6 (5.0)
その他	2 (1.7)
無回答	1 (0.8)
合計	121 (100.0)

(表 28) 「以下のことを援助交際だと思えますか？」(上段が中高生、下段斜体は母親世代)  
「ずっと年上の男性と」

	セックスやそれに近い行為をすること	お茶や食事・カラオケなどにつきあうこと
お金をもらって	120 (99.2%) (n=121) 26 (96.3) (n=27)	99 (81.8%) (n=121) 27 (100.0) (n=27)
服やバッグを買って もらって	118 (97.5) (n=121) 26 (96.3) (n=27)	96 (80.0) (n=120) 26 (96.3) (n=27)
お金はもらわないで	38 (31.4) (n=121) 15 (55.6) (n=27)	27 (22.3) (n=121) 14 (51.9) (n=27)

「年のあまり離れていない男性と」

	セックスやそれに近い行為をすること	お茶や食事・カラオケなどにつきあうこと
お金をもらって	108 (89.3%) (n=121) 25 (92.6) (n=27)	87 (72.5%) (n=120) 24 (88.9) (n=27)
服やバッグを買って もらって	96 (80.0) (n=120) 24 (88.9) (n=27)	70 (59.3) (n=118) 23 (85.2) (n=27)
お金はもらわないで	22 (18.3) (n=120) 13 (48.1) (n=27)	9 (7.5) (n=120) 11 (40.7) (n=27)

(表 29) 「『女子高生ブーム』は今も続いていると思えますか？」

いまも続いている	43 (35.5%)
もう下火だと思う	62 (51.3)
終わっている	11 (9.1)
わからない	5 (4.1)
合計	121 (100.0)

(表 30) 「『女子高生ブーム』はあなたにとっては良いことですか？悪い(嫌な)ことですか？」

良いことだと思う	23 (19.0%)
悪いことだと思う	28 (23.1)
どちらでもない	65 (53.8)
わからない	1 (0.8)
その他(良くも悪くもある)	4 (3.3)
合計	121 (100.0)

(表 31) 「あなたは早く大人になりたいですか？それともいつまでも中高生でいたいと思えますか？」

早く大人になりたい	49 (40.4%)
いつまでも中学生でいたい	5 (4.1)
いつまでも高校生でいたい	39 (32.2)
もっと小さいときに戻りたい	8 (6.6)
その他	19 (15.7)
合計	121 (100.0)

(表 32) 全体記事数推移 (90～96年)

	90	91	92	93	94	95	96	合計
記事数	23	29	17	135	185	86	193	668

(表 33) 主な書き手の記事数

	速水由紀子	家田荘子	西川その子	藤井良樹	白木雅彦	中森明夫	宮台真司	黒沼克史
	8	6	5	33	23	14	10	9

(表 34) 「女子高生」をめぐる語彙のタイトル及びリードにおける頻度の年次推移

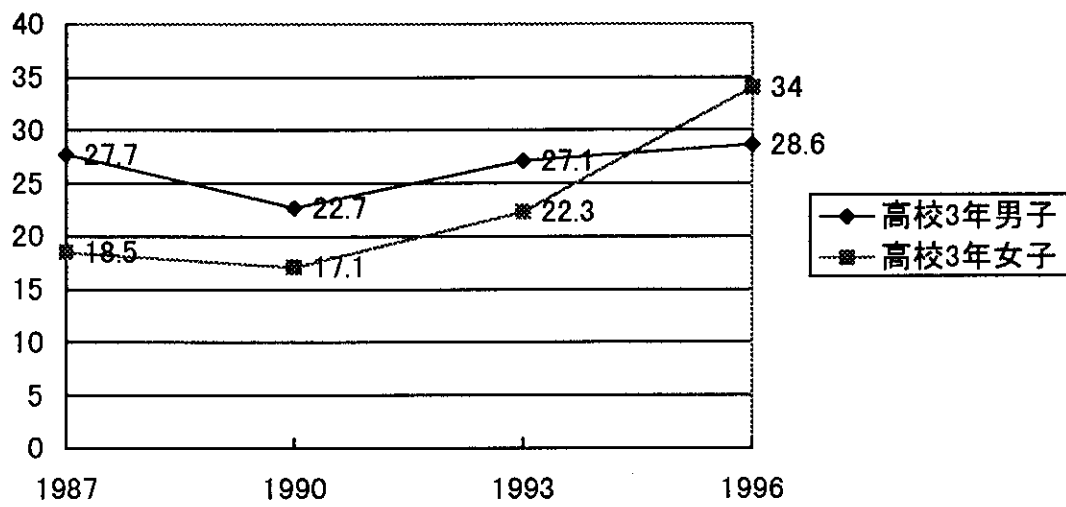
	制服	テレクラ	ポケベル	ブルセラ	コギャル	マゴギャル	援助交際
90	2	0	0	0	0	0	0
91	3 (1)	1 (1)	0	0	0	0	0
92	2 (1)	0	0	0	0	0	0
93	15	6 (1)	5 (1)	59 (3)	2	0	1
94	4 (1)	10 (1)	2	41 (3)	21 (2)	6	0
95	3	5 (2)	3 (1)	17 (5)	16 (2)	7 (2)	2 (1)
96	22	12 (4)	8 (3)	10	37 (4)	2	21 (5)

※括弧内の数字はリードに含まれていた数

(表 35) 連載記事、特集記事、写真を主とする記事の年次推移

	連載	特集	写真
90	0	3	6
91	0	0	3
92	0	0	1
93	3	1	22
94	2	13	37
95	0	4	18
96	5	8	31

図1 性交経験者の推移（高校3年生のみ）  
（%）





## ABSTRACT

### Sexual Commercialization of “*Joshikosei* (High-School Girls)” in Adult Magazines and Its Relationships with the Changing Sexual Behaviors of Adolescent Girls

Yasuko Muramatsu, Rika Sakuma Sato, Shin Tomabechi, Aya Hirano, Takayuki Okai

The aim of this study is to shed some light upon the changes in the pattern of social interactions between adult men and adolescent girls in contemporary Japan. In recent years, the so-called *enjo-kosai* (compensated dating) between adolescent girls and adult men has become one of the serious social problems. *Enjo-kosai* includes a wide range of relationships, from having an innocent chat over a cup of tea, to letting the man touch the body, to actually having sex with him, but the bottom line is that it always involves compensation by money or other valuables.

While many of the past studies focused on the behaviors of girls themselves, we decided to focus instead on the behaviors of men towards young girls. For this purpose, we chose to do two things. One is to conduct a survey on the streets of Tokyo asking teenage girls in school uniforms whether they have ever received a solicitation from adult men to engage in *enjo-kosai*. The other is to survey the articles in the magazines targeting adult audience, and see how the treatment of adolescent girls, particularly “*joshikosei* (high-school girls),” changed over the years between 1990 and 1996.

First of all, the result of the street survey shows that 75.2 percent of the respondents (whose average age was 16.34) had been solicited at least once by men who appeared to be older than 25-years-old. 47.1 percent had been solicited by men who were apparently as old as or older than their own father. 58.2 percent of the girls who had been solicited were offered compensation of money or goods. They were more likely to be solicited when they were wearing school uniforms than when they were in their private clothes. Although the link between *enjo-kosai* and the use of telephone services such as “telephone clubs” and “message dials” has been emphasized in the past, the current survey shows that a considerable proportion of schoolgirls today receive solicitation from men by just walking on the streets.

Secondly, the analysis of the magazine articles shows that the sexual commercialization of schoolgirls in the media during the 1990s proceeded in three stages. From 1990 to 1992, “*joshikosei* (high-school girls)” were often depicted as trend-setting consumers, and their sexualization was not so prevalent. But in 1993, the existence of *burusera* shops (shops which sold schoolgirls’ used uniforms and underwear to fetishist customers) came to attract media attention and the number of articles dealing with schoolgirls soared from 17 in 1992 to 135 in 1993. The number of articles fell in 1995 but it rose once again in 1996 to count 193. In this third stage, the word *enjo-kosai* came to be used mostly as a euphemism for “schoolgirl prostitution” in adult magazines, in spite of the fact that the word originally included non-sexual dating (with monetary compensation) in its definitions.

Although we do not have longitudinal data on the adult men’s behavior towards girls, there seems to be some correlation between the spread of the term *enjo-kosai* in the media after 1996 and the prevalence of on-street solicitation of teenage girls by adult men today. But we need more careful analysis of magazine articles before drawing any conclusions on the causal relationship between the two phenomena. It is also an important task for future researchers to investigate the impact of the constant “pricing” by strangers (as a kind of street harassment) on the self-esteem of adolescent girls.

## 中高年女性におけるテレビ、雑誌からの健康情報獲得行動に関する研究

浜松医科大学医学部看護学科

石垣和子、富永裕子

### Abstract

As the first step of study about the relationship between health-related information broadcasted from TV and the health behavior of audience, popular program among women aged 40 to 69 was investigated. The most favorite program was “Omoikkiriterebi”(82%) and popular program were “Kyouonokenkou”(69%), “aruarudaijiten”(64%). The preference of “Kyouonokenkou” and “aruarudaijiten” were related to age or interest in the health.

キーワード：マスコミ、情報、健康行動、中高年女性、番組

### I はじめに

近年マスコミが発する情報量は肥大化し、それに伴い、テレビや新聞、雑誌を通じての健康に関する情報も膨大な量が否応なく地域に暮らす人々の元へ届いていると思われる。

喫煙・飲酒行動に影響を与える情報源を研究した久保らは、喫煙情報源としてはテレビ、新聞、雑誌が、飲酒情報源としてはテレビ、新聞、ラジオが多く認識されており、禁煙、節酒に有効だったのは医師、友人、家族からの情報で、次いでテレビが挙げられたと報告している<sup>1)</sup>。この研究から、喫煙や飲酒問題に限らず健康に関する情報源としてもマスコミ情報はおそらく重要なことが示唆されるが、それが有効な情報源となっているかどうかについても検証する必要があることも示唆されていると思われる。

地域看護活動の現場においても人々の健康に関する知識が量的に増加していることを実感するが、マスコミ情報に直接影響された一時的な行動や誤った認識などに遭遇することもしばしば起こっている。健康思想が広まれば広まるほど、今後も健康問題はマスコミ界の関心事としてさらに情報が提供されると思われ、それにつれ人々の健康への関心もますます高揚することが考えられる。そのこと自体は歓迎すべきことであるが、そこで必要なことは、人々の自己判断能力を高め、個人や家族、地域全体の生活に根ざしたセルフケア能力を高めることと思われる。そのような観点から最近のマスコミ情報の質・量について検証を試みるが、その第1ステップとして、この研究ではどのような番組や雑誌が40代から60代の中高年女性に好まれているかについて明らかにすることを目的とする。

### II.方法

浜松市K町とS町に在住の40歳以上69歳以下の女性に対し、質問紙郵送法によるアンケート調査を実施した。調査対象は、浜松市住民基本台帳の両地区から40代・50代・60代の年代別に無作為に66~67名ずつを抽出し、1地区200名、合計400名とした。40才

から69才までの女性（以後中高年女性と呼ぶ）は、多くが家族の健康管理役を自負し、また期待もされていることが予想される。すなわち本人への影響だけでなく、たまたまマスコミ情報に接しなかった家族員にまで間接的に影響を及ぼす可能性がある存在として重要だと考え、研究対象とした。調査時期は、平成10年11月であった。

調査項目は、1)年齢・仕事(6段階)・同居家族員・健康への関心度(4段階)・健康行動(4段階)などの回答者の属性に関する項目、2)健康情報源の種類、具体的な番組や記事の好み、実生活にどのくらい取り入れているか等に関する項目である。返送数は187(回収率:46.8%)で、そのうち無効回答1を除いた186を解析対象とした。集計・解析には統計解析パッケージSASを用いた。

### III 結果

#### 1. 回答者の年齢分布

表1に回答者の年齢分布を示した。年齢分布はほぼ均等であった。

#### 2. 回答者の就業

表2に回答者の就業状況を示した。

表1

年齢(才)	回答者数	割合
40-44	35	19.0
45-49	27	14.7
50-54	30	16.3
55-59	28	15.2
60-64	37	20.1
65-69	27	14.7

表2

P<0.001

年齢(才)	常勤		パート週4日以上		パート週3日以下		自営業		なし		Total
	人数・%		人数・%		人数・%		人数・%				
40-49	13	20.97	15	24.19	3	4.84	11	17.74	20	32.26	62
50-59	14	24.14	13	22.41	3	5.17	10	17.24	18	31.03	58
60-69	1	1.61	4	6.45	4	6.45	15	24.19	38	61.29	62
Total	28	15.38	32	17.58	10	5.49	36	19.78	76	41.76	182

#### 3. 回答者の健康への関心（健康に気を使うかどうか）

健康に気を使うかどうかを表3に示した。年齢が高くなるにつれて“とても”気を使う割合が増えていた。

#### 4. 回答者の情報の行動化

「見たり、聞いたり、読んだりしたことを積極的に生活に取り入れて試してみる方か」という設問に対する回答結果を表4に示した。年齢による大きな差は見られなかった。

#### 5. 主な情報源と情報源への満足

健康に関する情報源とそれらへの満足度について、テレビ・雑誌・新聞の3種類のマスコミと、家族・友人・近所・職場などの口コミ、行政の発行する広報に分けて質問したところ、図1のような結果が得られた。

表3

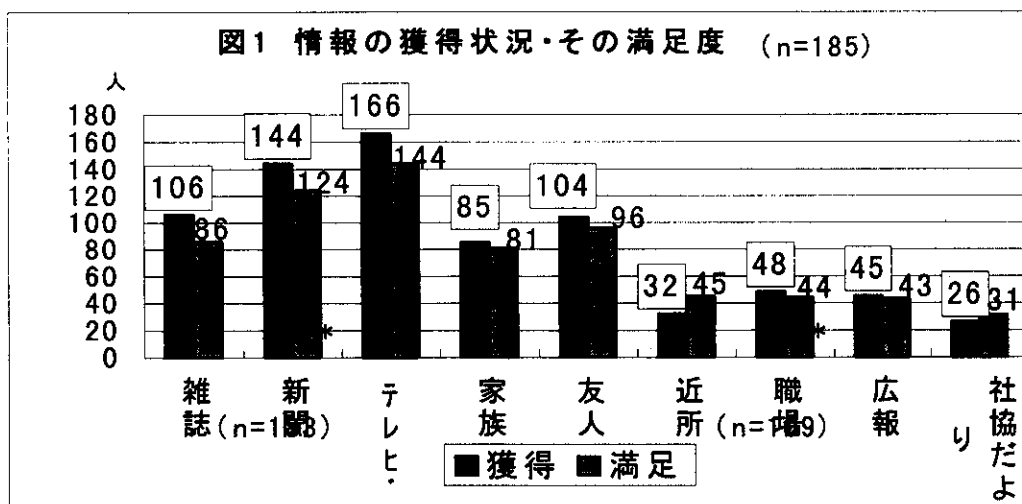
p<0.001

年齢(才)	とても気を使う	まあ気を使う	あまり気を使わない	合計
40-49	7	40	15	62
%	11.3	64.5	24.2	100
50-59	19	31	6	56
%	33.9	55.4	10.7	100
60-69	27	31	3	61
%	44.3	50.8	4.9	100
合計	53	102	24	179
%	29.6	57.0	13.4	100

「獲得」とは、「おもに得る」及び「まあ得られる」の合計とし、「満足」とは、「とても満足」および「まあ満足」の合計とした。テレビ、新聞、雑誌、友人の順に情報源となっていた。いずれの情報源も満足度が高かったが、マスコミ情報は口コミ情報及び広報より劣る傾向が見られた。

表4

年齢(才)	とても積極的	まあ積極的	あまり積極的でない	非積極的	合計
40-49	2	38	18	3	61
%	3.2	61.3	29	4.8	100
50-59	4	35	17	1	57
%	6.9	60.3	29.3	1.7	100
60-69	8	33	17	0	58
%	12.5	51.6	26.6	0	100
合計	53	102	24		179
%	7.6	57.6	28.3	2.2	100



#### 6. 具体的なテレビ番組、雑誌の種類への視・読と有用感

表5に具体的な雑誌名・番組名別の読んだり見たりする人の割合と、年齢・健康への関心度・健康行動との関連を $\chi^2$ 検定を用いて示した。テレビについてはその有用感(役に立つかどうか)も示した。挙げた雑誌の種類については、健康を扱っている雑誌として登録されているうちから発行部数の多いものを選択した。テレビ番組については、プレテストの結果に基づいて挙げた。「読む」とは、「たいてい毎回」「時々」「たまに」読む人の合計、「見る」とは、「たいてい毎回」「時々」「たまに」見る人の合計とした。

##### 1) 雑誌について

雑誌毎に調べた「読む人」は最高でも「NHKきょうの健康」の51%であった。

##### 2) テレビ番組の視聴について

番組別の視聴状況では、「おもいっきりテレビ」が最も多く、80%以上の人に見られていた。続いて「NHKきょうの健康」、「あるある大辞典」だった。

①番組視聴と年齢との関係は、「おもいっきりテレビ」は年代間で差がなく、「きょうの健康」は50代・60代で見ており(83%・80%)、「あるある大辞典」は40代が見ていた(76%)。